

介護福祉養成教育における過疎山村集落訪問による学びの可能性 「人間と社会」「人間の尊厳」の学習にあたって

A Study of the Learning Possibility on the dignity and Sociality of the elderly from the Depopulated Mountainous Village

新井 幸恵
Yukie ARAI

要 約

高齢化の進行は要介護高齢者を生み出し、いかなる時でもその尊厳を守り抜く必要から介護の質が常に問われる時代となった。介護福祉士教育の中で心身の不調によりその意思が述べられず、人格を損傷されかねない高齢者の支援はとりわけ重要である。ここでは社会的な存在である人間を理解するために「人間と社会」「人間の尊厳」を重視する思想を基盤としている。しかし、社会的な経験の少ない介護福祉を学ぶ学生たちが、人間の尊厳を理解することは容易ではない。山間過疎地域という居住条件の厳しい集落の高齢者の生き方から、これを学びとろうとした。埼玉県A市B集落への3年間の継続的な訪問から、学生たちが気づいてきたことを10名の感想文の記述から検討し、過疎山間集落訪問の学びの可能性を考察した。なお、介護福祉士養成課程で学ぶ学生を、介護福祉を学ぶ学生と呼ぶことにする。

第1節

はじめに

(1) 介護福祉養成教育における人間と社会、人間の尊厳の学習の必要性と困難性

国民の介護に関する期待は高く、選挙公約では勿論のこと、報道に「介護」の文字の踊らない日はない。このなかで、制度設計、労働条件、労働環境などを反映した介護の水準が利用者のニーズ

に必ずしも合致しない現状の中、教育への期待は大きい。中でも当事者の尊厳をどのように把握・理解するかは大きな課題である。厚生労働省老健局長の私的研究会・高齢者介護研究会「2015年の高齢者介護」(2003)では「高齢者の尊厳を支えるケア」の実現を目指すことを基本に据え、中長期的な介護のあり方を描いた。また介護福祉士への国家試験等を設けた2007年の社会福祉士及び介護福祉士法改正を受けたカリキュラム改訂でも、領

域「人間と社会」において『人間の尊厳と自立』の中で人間の多面的理解を重視し、また『社会の理解』の中で都市化及び過疎化と地域社会等を含み、ライフスタイルの変化や社会構造の変容の中で暮らしを捉えうる人材育成を目指している¹⁾。

「尊厳」については、第二次世界大戦の悲痛な人類の経験から、以下のようにとりわけ人権に関する視点が論議され、様々な権利宣言に凝縮してきたが、同様に介護福祉領域で尊厳を語る意味はまさに人権の保障と不可分に結びついている²⁾。

日本国憲法前文では「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようとする国際社会に於いて名誉ある地位を占めたいと思う」とされている中から、人間の尊厳の中心的課題をみることができる。世界人権宣言(1948)では、その前文において「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利」として公布することを謳い、すべての条項で人間の尊厳を冒すことのできない権利として説いている。

社会福祉士および介護福祉士法(1987)第44条の2においても「社会福祉士および介護福祉士は、その担当するものが個人の尊厳を保持し、その有する能力及び適性に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、常にその者の立場に立って、誠実にその業務を行わなければならない。」とする。また、介護福祉の対象は社会福祉士及び介護福祉士法47条2項に見るように「その業務を行うに当たっては、その担当する者に、認知症であること等の心身の状況その他の状況に応じて、福祉サービス等が総合的かつ適切に提供されるよう、福祉サービス関係者等との連携を保たなければならない。」として認知症に象徴される、心身の状況によって尊厳を奪われやすい市民が対象の多くを占めていることを前提としている。介護福祉を学ぶ学生にとって、人間と社会の関わりを深く考察し、利用者が尊厳を奪われてきた歴史、尊厳を奪う者・事への理解、尊厳を守りぬく決意を地域

社会と共有することは基本的な役割ともいえる。

しかし、核家族化が進み、1980年代以降に生まれ育った学生たちは近隣や高齢者との対人関係に乏しく、さらに昨今の不況を受けてアルバイトと大学の往復で終わりがちな日常でさえある。このため、学生が社会の中の人間を理解する難しさ、尊厳を奪われやすい人々の本来の姿、ニーズ・希望を想像してゆく事の難しさは、教員は授業や実習においてたびたび気付かされる。生活経験の少ない学生は利用者の社会的背景、生活史への想像・追想が困難で、その想いに近づくことは容易ではない。例えば重度の認知症高齢者の介護に関わる際、その人の従来暮らしを共感的に理解し、今は見えないその人生やその想いを、想像しようとする力が育まれていなければ、尊厳を支えようとする動機は弱まる。介護福祉の関わりの中で尊厳を保障するとは、その人が今に至る人生の道りを、どのような思いを持って「生きて」こられてきたかを、まず理解することから始まる。生活史の理解とは単に年代と出来事の羅列ではない。

一方、2009年にスタートした新カリキュラムでは、財政事情を優先した施設から在宅への転換、医療からの要望に呼応した介護への転換、「社会の理解」の項目や時間数が大幅に減少し臨床上の知識や技術への転換等から、「医療に特化した」とも言われている³⁾。また2010年4月に発表された「地域包括ケアシステム研究会報告書」⁴⁾、では介護保険財政の困難から要介護1、要支援1・2の軽度者の生活援助を介護専門職によるサービスから有償ボランティアによるそれへと誘導し、利用者の尊厳を支える専門職と生活上のニーズを持つ人の関わりを断とうとしているかのようさえ見える。2006年、社会保障審議会福祉部会による「求められる介護福祉士像」⁵⁾が示されたが、これを踏襲するばかりではなく、現状の困難を見据え、その原因や変革の可能性を多角的な視点から思考する力(批判力と社会資源を当事者や仲間とともに切り拓き創造する力)こそが求められて

いる。尊厳の理解という点でも、尊厳が危機にさらされている社会の現実をこそ直視する必要がある、静的ではなく、能動的な理解が求められている。石田（2001）は「社会的諸関係」の中で人間や障害を捉える視座の必要を訴え、「その人らしさ」を理解するということは実に能動的な営みで、介護福祉職の意識が反映すると述べ、その内的な成長が欠かせないことを挙げている⁶⁾。

（2） 介護福祉養成教育における過疎山間集落を活用した、人間と社会・人間の尊厳の学習の契機

しかし、これらを学ぶにあたっての介護福祉士教育のフィールドは、一般には施設事業所を中心とした介護実習等であり、利用者は既に心身の表現力や行動力が衰退している時期であり、「その人らしさ」を捉えようとするには初学者には困難が多く、勢い臨臨床的にならざるを得ない。

筆者は生活が展開されている地域社会の中で学ぶ機会が、これらの期待に応えうるのではないかと考えて来た。とりわけ農山村や漁村では、第一次産業の衰退等に伴う急激な過疎化・高齢化を背景とし、多くの生活困難の解決に支援を必要としながらも、共同体と人間、自然と人間、社会・歴史と人間、人間の営みや関係が豊かに残されており、継時的に理解し易い土地である。尊厳を支えるケアを学ぶにあたって、石原（2006）は「過疎地域での山村と都市の交流の実践から得た、高齢者の誇り高く生きる姿に触れ、尊厳を学ぶことに気付く」⁷⁾として過疎地域での学習の有効性を述べている。国土面積の57%、市町村の45%、人口の8%、人口減少率の拡大が広がる過疎地域での困難は、一部地方の課題というより生態系の維持発展や産業構造の是正、国土保全といった公共的な課題として、国全体のありかたや進路を問う課題といえる⁸⁾。こうした土地には内山（2009）の言う日本人の「精神的古層」⁹⁾が残されており、日本人の根源的な理解を可能にする場でもある。

宮本（1977）は山口県岩国の山中での一人暮らしの老婦人の例を挙げ、誇りを持って生きる姿に触れた体験等、山間僻地での多くの日本人の誇りある生き方を取材している¹⁰⁾。また村人への傾聴からその学びを継承する役割を得て、学生自身の尊厳もまた自覚される場でもある。

また、総務省では市町村を軸に、当該自治会や各種団体、または大学など教育機関の関与で過疎地域の維持展開を提起してきた。「市町村には地域コミュニティやNPO、企業、大学等地域内外の多様な主体の力を組み合わせ、連携させながら、地域経営を行ってゆく視点が求められる。」等教育機関の役割への期待が示されている¹¹⁾。従来多くの教育機関が様々な立場から過疎地域への支援や研究を体系的に重ねてきたが、このことで教育機関側の蓄積は大きいと思われる¹²⁾。

一方、都市農村交流事業における農業・農村の教育的機能や、サービラーニングの流れにみる相互教育的な現場の価値、また農林学系授業で行われている大学教育における農山村の価値を概観すると、「支援」という関わり以上に集落からの「学び」の収獲が注目されている。多炭（2010）は集落訪問から、農業分野の専門的な学習効果に加えて、コミュニケーション、住民の温かさに触れ新しい価値観に出会ったこと等を挙げる。支援と学習が相互に分かちがたく存在しており、学生が集落の価値を発見しつつ学ぶ姿勢を持つことは、間接的であれ何らかの貢献に結びつく可能性を持つ。多炭は「『専門教育の場としての農山村の価値』を今後大学・農山村双方にきちんと伝達してゆくこと」は「農山村にとっての新たな誇りや振興活動の動機につながる」¹³⁾可能性を持つと示唆している。この事は介護福祉分野にとっても応用できる知見と思われ、ここでは介護福祉の立場からこうした手法で得た結果を考察する。

埼玉県A市にあるB集落への訪問は、2007年からの筆者の山間集落に住む高齢者介護の現況への関心から始まった¹⁴⁾。訪れ学んだ体験から、介護

福祉教育における社会の中の人間の理解、人間の尊厳の理解を試みた。A市は先取の気風があり、集落支援政策をモデル事業として取り入れ、学生の学習にも協力いただいている地域である。B集落は埼玉県ではもっとも過疎化・高齢化が進行し、地勢や労働、また高齢化に伴う幾多の困難がありながら、多彩な連携を取りながら集落維持に取り組んでいる。介護福祉を専攻する筆者のゼミ生や学内の農園サークル（「にこにこ農園同好会」）希望者が参加している。筆者の訪問で得た、行政や自治会、社会福祉法人との関係性を生かして、学生側の事前学習とともに現地の調整を行った。

第2節 研究目的、研究方法

(1) 研究目的 介護福祉を学ぶ学生が過疎集落訪問により、人間と社会、人間の尊厳の理解を深める可能性を探る

(2) 研究方法

2007年より介護福祉を学ぶ学生が、継続的に訪問した埼玉県B集落での学びについての感想文から考察する。

(3) 地域の設定 A市の中心地から車で1時間15分、標高400～500Mの山間地、生活に必要な公共施設は地域コミュニティーセンターがある。介護保険事業所や施設はないが2006年よりA市内S社会福祉法人よりミニデイサービス、2010年度より要介護者に対し群馬県C町Y社会福祉法人のデイサービス、A市内S社会福祉法人の家事援助ホームヘルプの提供が始まった。人口は40人台と高度経済成長時、1972年最盛時の10分の1であり、転入はまれで、2009年人口は2000年の40%である。高齢化率76%、65歳以上の住民の独居率は30%以上である。しかし、当集落はもっとも地勢的に不利地域でありながら、住民組織が市町村とともに集落維持の試みを持続させてきた地域である。ここでは高齢者の多くが可能な限り住み続けたいという意思を明確に持ち、

市町村や自治会、また他出子・孫世代のサポートを受けながら自律的に暮らし続けている。¹⁵⁾

B集落中央までは、大学から3時間の距離であり体験を深める為に宿泊を伴う場合が多いが、可能な限り現地での民泊、または公民館などでの宿泊を経て、近隣関係、集落の自然や早朝夜間の推移を体験している。また、2008年度のA市主催の過疎集落支援会議、また2009年度には集落住民、B集落自治会役員会を軸に、市町村及び埼玉県、集落外に居住する元住民、ボランティア、大学教員・学生等が参加、「A集落を考える会」が組織化され、ゆるやかな連携を目指している。2010年度からは学生の集落訪問活動には埼玉県農林部農地活用課の「埼玉県ふるさと支援隊事業(山村振興法)」が立ち上がり、8大学10エリアに、財政支援をはじめ学習に必要な情報提供等が行われている¹⁶⁾。

第3節 結果

(1) 2007-2010年訪問経過、及び介護福祉士の学習課題との関連

表1に2007年より今日に至る学生による訪問経過を、表2に訪問した学生数の推移を、表3に訪問目的別学生数を示す。表4に訪問の際の話題内容を、表5に訪問の学びが形として作品、論文などに残されたものを挙げた。このことから学生の継続的な集落訪問のメッセージが、先輩から後輩へ受け継がれ理解を進めている様子が伺える。レポートや論文にしたものを読み、ボードに作成された掲示や映像などによりかかわりの姿から学ぶことができ、例えば集落に伝わる「花輪踊り」の復活の試みも3学年を貫いて後、実現している。訪問はいずれも介護福祉に関連しての学びを目標に置いた。

介護福祉士養成2009年カリキュラム、領域「人間と社会」の中の「人間の尊厳と自立」に示された小項目：「人間」の多面的理解、人間の尊厳、

表1 3年間の訪問経過と学習課題(2007.8~2010.7)

年	月	学生が同行した集落などへの訪問	学生数	主な学習テーマ
2007	8	○社会福祉法人ミニデイサービス同行 ・高齢者A宅訪問	3	・地域固有の事業の理解 ・ふれあい
	12	○自治会長B宅での宿泊(2005年度生) ○高齢者C宅訪問	3	・集落の地勢、組織、行政、福祉ニーズ ・移動に障がいを持つ一人暮らし高齢者の暮らし ・集落内自治組織の在り方と課題
2008	3	○ゼミ合宿(2005年度生) ・D夫妻訪問 ・こんにゃく作り体験 ・自治会長から集落維持について伺う ・集落支援員の話伺う ・B集落をめぐる写真展を観る ・他出者E氏から集落の暮らしの思い出を伺う	7	・ふれあい ・インフォーマルな地域支援の在り方 ・山村農林業の歴史 ・過疎山間集落の課題 ・集落の地勢と暮らし ・自然とともに過ごした子供時代 ・養蚕、炭焼き、こんにゃく作り等で働く女性の歴史
	4	○ミニデイサービス参加 ○保健福祉総合センター支援会議 過疎地域支援事業立ち上げ	3 1	・過疎地域のデイサービスが持つ役割 ・地域保健福祉支援組織形成の実際
	5	○産直試作協力・第1回 ○市内歴史家K氏訪問	1 3	・ボランティア組織の役割と期待 ・集落の歴史、文化財の保護 ・地域保健福祉支援組織形成の実際
	6	○県秩父保健福祉総合センター支援会議	2	・地域内連携 自然との関わり
	8	○ゼミ合宿(2005年度生)	3	・集落の歴史、助け合い年中行事
	8	・高齢者E宅訪問 ・自治会長訪問	3	・集落の課題秩父市の過疎政策
	8	○支所訪問、過疎対策概況聞き取り	3	・人間と社会の関わり
	2009	2	○つり橋サロン準備(2006年度生) ・高齢者F宅訪問	4
5		○ゼミ合宿(2006年度生) ・山登り ・ワラビ採り ・産直試作協力・第3回 ・高齢者G宅訪問 伝統芸能について	4	・自然の中の人間の生活 ・古文書から見た集落の歴史 ・都市と山村交流の実際 ・伝統芸能が失われた過程とその想い ・耕作放棄地の出現と回復 ・ニーズの傾聴

	8	○ゼミ合宿・民泊（2007年度生） ・集落宿泊体験（農作業指導受ける）	7	・伝統行事の維持継続への想い ・地域の歴史とその背景
	10	○十八神社祭り手伝い	1	・高齢者の生活時間について
	10	○学園祭のための情報収集 ・秩父事件フィールドワーク ・H・I宅訪問	4	・生活の楽しみについて ・集落支援課題について ・傾斜地の農業維持継続の厳しさ
	10	○集落支援員訪問 ○ボランティア農作業手伝い	1	・生きがいを支える仕組み
	12	○産直用こんにゃく作り	4	・農作物加工の難しさ
			1	・素材の旨み 共同作業の体験
2010	3	○要介護者3名が通所し始めた群馬県A市の特別養護老人ホームを見学、体験ミニデイサービスへ参加	2	・過疎集落での社会資源活用の実際
	3	○阿熊集落活性化講演会	2	・集落間連携、自治体と住民組織の連携 ・ボランティア活動の在り方
	5	○ボランティアによる「縁側サロン」の協力 ・山岳信仰跡神社参り ・林道見学	7	・多様な地域連携の様相の理解 ・集落での信仰と住民の想い ・困難な地域での林業継続の歴史と価値
	6	○蕨とりと「高齢者と農」についての聞き取り	2	・農作業と生きがい、自然と人間の相互関係、山村の困難と魅力 ・初めて自動車が走った時代 ・集落行事への想い
	7	○ゼミ合宿（2008年度生） ・花輪踊りの収集 ミニデイサービス参加	6	・喪失した伝統芸能存続への想い ・花輪踊りの思い出 ・祭りの思い出 ミニデイサービス参加者との交流

表2 年次別訪問学生数

年 度 \ 学 年	2005年度生	2006年度生	2007年度生	2008年度生	実人員
2007年度	3名				3名
2008年度	8名	4名			12名
2009年度		4名	7名		11名
2010年度(7月迄)			4名	7名	11名

表3 2007年8月～2010年7月 学生の主な目的別訪問数と延べ数

訪問内容	回数	延べ学生数
高齢者訪問	14回	38名
自治体（保健福祉）訪問聞き取り	5	8
集落自治会長との懇談	3	13
農作業 食作り 収穫体験	6	24
山岳信仰跡の山登り 林道案内	3	13
ミニデイ・サロン手伝い	7	33
郷土歴史家 訪問	3	7
伝統文化・遊びの聞き取り	3	13
集落支援員 聞き取り	2	8
ボランティア作業手伝い	2	2
祭り参加	1	1
計	49回	160名

表4 訪問での主な聞き取り内容

山間地農業とともにある暮らし
伝統芸能 行事 遊びや楽しみ
集落の変遷・歴史
暮らしの不自由と保健福祉行政への希望

表5 学習結果

成果	学年	年月	内容	学生数
卒業論文に引用(*)	2005年度生	2008-3	卒業論文テーマ「過疎集落での学生の貢献とは」	1名
	2005 "	2008-3	同「過疎集落に住み続ける想い」	1名
	2005 "	2008-3	同「過疎集落に住み続ける為の一考察」	1名
	2006 "	2009-3	同「老いと寂しさー山間集落で暮らすAさんのインタビューを通じて」	1名
	2006 "	2009-3	同「郷土芸能に寄せる高齢者の想いを探る」	1名
	2007 "	2010-7	同「過疎集落に暮らすA氏の魅力を探る」	1名
	2007 "	2010-7	同「農作業が高齢者に与える影響」	1名
学園祭発表	2007 "	2009-10	2009年学園祭： レッツ・エンジョイ秩父	7名
舞踊復元の取り組み	2008 "	2010-7 ～10	2010年 村祭りに向け「花輪踊り」の復元	8名
報告集	2008 "	2010-6 ～	ブログ・DVD「太田部に学ぶ」の作成	9名
就職の面接で紹介	2008 "	2010-7	2010年 就職面接・エントリーシートに活用	4名

(*) 卒業論文に引用：集落への訪問で得たインタビュー記録を卒業論文に引用、活用したものを示した。

身体的・精神的・社会的な自立支援、また「社会の理解」に例示された小項目：家族・家族の変容、家族観の多様化、地域概念、コミュニティの概念、過疎化と地域社会、地域社会の集団と組織、グループ支援、組織化、エンパワメント、女性労働の変化、地域社会の変化、自助、互助、共助、公助の概念などに照らして、表1に挙げた「主な学習テーマ」を整理した。

(2) 人間と社会、人間の尊厳の理解に関する学生の学びを、無記名自由記載による感想文から考察する。

2010年度5~7月に訪問した、2008年度生：2007年度生11名中、回答があった10名から学びや気づきの内容を考察した。

① 人間と環境、環境に働きかける個人、困難な場面でも楽しみや誇りを見出している村人に気付く

・宿泊場所の近所の家を訪問させていただいた時、どの家も花がきれいに咲いており、ちゃんと手入れがされていることに凄いなと驚いた。話を聞いていると草木や畑の仕事がお好きであることが分かった。逆に手入れされていない杉林や畑を見たときには可哀そうだと思った。畑は傾斜地が多くまた小さな礫が混在しており、耕作は人一倍手がかかる事を知り、膝や腰が痛むとおっしゃりながらの作業の大変さが分かった。しかし、それを楽しんでいることが驚きだった。(2007年度生・1)

・集落のシンボルである山登りに挑戦した。案内のA氏によれば一人暮らしのB氏(女性)はこの山道を開墾し、子供を背負子に入れて上り下りしたという事で、大変驚いた。自分一人でも汗びっしょりで登る事さえ大変だったのに。(2008年度生・1)

狭い山道を車が進みゆくたびに「どうしてこんな奥深いところに人が住み続けているのか」とすべての学生が驚きと、戸惑い、または悲しみの混じった気持ちで山また山の車外を見つめている。決して自然環境の素晴らしい土地に住む人々とは思わない。しかし、この時から山間地域から平野部に下りず、住み続けている住民の多彩な想いに共感しようとする営みが始まっている。こうした想いを抱いて集落に向かい住民と関わり触れ合う中で、その生き方に関心を持ち、驚きとともに共感や尊敬の気持ちを広げている。

② 住民の願いをみつめた地域の諸組織の連携の在り方を学ぶ

・ミニデイサービス(当日は牛乳パックでの椅子作り)に出て見て感じたことはデイサービスというよりは地域の寄り合いという雰囲気だった。200年前の名主の家であったという木造の古い建物であること、畳に座って炬燵に当たりながらよもやま話をしていくことで、土地にあったサービスが行われていることを知った。(2007年度生・1)

・ボランティアが作った縁側サロンに近所の皆さん、自治体職員等と参加した。足の確保が難しいので全員の参加は無理としても、いらっしゃった方々はお互いしゃべりながら収穫した蕎麦やヨモギなど野生の食材を使ったてんぷらを楽しんでおられた。回数は少なくともこういった試みは一人暮らしの方々のちょっとした楽しみや生きがいにつながるのではないかと思った。

(2008年度生・1)

・集落支援会議に参加した。集落の皆さんと市町村の方々とのアイディアや意見を合わせて出来る所から始めてゆこうとする姿勢に住民本位の在り方を学んだ。

(2008年度生・1)

住民を中心にした地域連携組織が立ち上がってきた。市町村合併で最も集落から中心部への道のりが遠くなったB集落。行政の目が届きにくい地域へ関わり続けようとニーズを探り続ける行政、要望や実態を伝えようと話し合う住民を見て、地域社会の支援が人間の誇りを配慮しながら行われている事に気付いている。

③ 介護を必要とする人の生活環境の理解、心身の不調はあっても自律的主体的に生きようとする高齢者像に気付く

・90代のK氏に農作業への想いを伺った。畑を荒らす野生動物の話になり、柵作りの苦労なども伺った。それでも被害には逢うが、「動物と分け合って食べているんだよ」と柔和な笑顔で仰っていた。K氏はすべてを受け入れ、山と畑との素敵な共同生活をされていることが感じられた。K氏は月2回程度息子さんの訪問があり買物、受診などを済ましている。(2007年度生・2)

・どんなに足腰が悪くても山の斜面にある畑を続けたいという想いを聞き、畑は楽しみで生きがいなのだと思った。

(2007年度生・2)

・心身が不自由になると女性として恥ずかしい事態が訪れると、涙を見せて語ってくださったJ氏の想いが伝わってきた。話に耳を傾けていると、今までのご苦労の事も語られこの土地で生きてゆく決心の様な想いを語られ、だんだん笑顔が浮かんできた。

(2008年度生・2)

・昔の暮らしや生活に耳を傾けることが重要だと思った。高齢者が一人で住んでいるが、そこにはかけがえのない楽しみや想いがあって、それを守る事の大切さに気付く。同時に福祉の考え方が時に押し付けになってしまう危険にも気付いた。高齢者施設で暮

らしている方々に「人間らしい生活」をしていただきたいと思う時に、B集落で暮らす人々のありようからヒントをもらえるのではないかと思った。(2007年度生・3)

介護認定を受けている高齢者が、みな一人暮らしであることから、その訪問を経て、多様な想いに気付いている。決して一人暮らしに十分な条件があるわけではない環境にあって、可能な限り自律的に生きようとされている様子はやはり感動的である。在宅介護実習等の経験に加え、利用者を地域社会との関わりの中での能動的な生活者として関わる体験は、介護を受ける客体としてではなく、能動的な主体として認識する機会となった。またこの訪問の機会は、傾聴を基本としたコミュニケーションが基本であり、それまでの学びが生かされ深められている。

④ 多様な生活文化、先祖とともにある暮らし、その変容を理解する

・特に、1時間以上かけて(集落のシンボルの)T山に登ったことが強く印象に残った。事前にB集落について聞いていたが、実際に行ってみると想像以上のものがあつた。足場の悪いT山の神社に80歳のM婦人が、慣れた足取りで登り、持参してきたお赤飯を竹で拵えた入れ物に入れ供えている姿に、代々受け継がれてきた大切なものがここにもあることを感じた。その大切なものを残していかなければならないと思った。

(2008年度生・3)

・七夕祭りを終えた公民館の笹を、近くの川まで持って行って流した。こういう習慣は聞いたことはあるが自分でやるのは初めてだったので驚いた。(2008年度生・4)

・村を歩いていると倉にそれぞれのマークがあり、これは「屋号」や「家紋」であるこ

とを案内のD氏から教えていただく。どの家にも家紋があり、屋号がある。家を継続してこられた誇りと親しみを感じた。この土地に古くから住み続け、先祖とともに今の暮らしがあるんだなと思った。

(2008年度生・4)

- ・ 沢山の方から、昔の賑やかなお祭りの話等、貴重な話を聞くことができた。お祭りで村の若い方々みんなで頑張った「花輪踊り」を再現したいとお願いしたが、「もう分からない、忘れてしまった」となかなか踊っていただけなかった。半分諦めていたところMさんやAさんが、村の皆さんに励まされ踊りだしてくれ良かったと思った。歌や踊りなど無駄に思える事ではあるけれど、生活の楽しみの一つとして大切に継承すべきものと思った。(2008年度生・5)

1950年代には消えてしまった村祭りをにぎわした「花輪踊り」の復元は、学生のインタビューからヒントを得たアイデアである。往時の賑やかな大衆文化を住民が語るときの喜びを3年間かけて学生が継承、この10月に村祭りで踊った。集落がもっとも活況を呈した高度経済成長時代直前の(テレビがないころの)思い出が、あふれるばかりに残されている。古き良き時代はFやGの体験や見聞からも伺え、共同体の誇りとでもいうべき精神を感じとっている。

⑤ 過疎化の進行と地域の絆の再構築の可能性を知る

- ・ B集落に暮らしている方々は私たちの暮らしから見ると大変不便だが、ご自分たちの暮らししている地域への愛着や誇りを持っているんだなと思った。あんなに遠い耕地の知人とも名前で呼び合い、野菜を分け合っている。やはり住み慣れた我が家が一番な

んだなと思った。(2008年度生・6)

- ・ 休校になった学校の掃除の時、途中で水が出なくなった。その時地元の人が「これ以上使うと同じ水源を使っているこの下のHさんが困るからね」と言われた。水一つ使うときも村のみんなの事を考えていることを知り村の絆を感じた。

(2008年度生・6)

- ・ 想像以上に過疎が進んでいた。民家と民家の距離があり、気軽にお隣りへ行けないし、その道は傾斜が激しく、交通手段もない中、若い人でも徒歩での往復が困難ではないかと感じた。このような地域で、また高齢化率の高い土地でどのようにしてお互いがコミュニケーションを取っているのかと不思議に思った。しかし、お互いの絆の様なもの、もてなしの心には都市とは違う良さがあった。互いを名前で呼び合う仲、水の供給に気を使う関係、新鮮な野菜や草花を提供し合っている気持ち等、ゆったりとして時間が流れている中に温かさがあった。

(2008年度生・7)

「絆」への気付きは学生には新鮮であった。

- ⑤は何人も学生が気づいており、地域共同体が日常的に生きていることを住民の言葉や行動から肌で感じていた。過疎化が進行し住民の心の荒廃が想像されていたが、むしろ地域の心遣いが強まって、ここで暮らしてゆきたい気持ちや希望を支えているのではないかと観察している。「絆」は良くも悪しくも集落を規定しており、村落共同体の歴史を踏まえる必要もあろう¹⁷⁾。

⑥ 傾聴から語られた様々な労働、戦争、農業、家族の回想から、未来へのメッセージに気づく

- ・ Y氏(93)が縁側でネギ坊主から黒い種を

採っていた。一緒にネギの種を取りながら畑や養蚕をしていたころの話になり、昔使っていた道具の話から自然な回想が始まった。戦争の話をしているときにはしみじみした顔になり、農業に関しては笑顔で生き生きと話していることが感じられた。

(2008年度生・5)

- ・T氏から村の神社で賑やかに行われていた祭りの話を聞く。「どうしてあんなに一所懸命練習したり、笛や太鼓を習いに行っていたのか分からねえ」という言葉から、むしろ昔の伝統を受け継ぎたいという想いが十分伝わってきた。(2008年度生・7)

80年前の事でも生き生きと語られる多様な高齢者の想いに気付く。若い層に伝えようと回想が次から次へと深まってゆく様から、この集落で生きてきた誇りや未来への持続を希求する想いが汲み取られている。集落を訪れる若い人へのメッセージを受け止め、自分たちの価値にも気付いている。

⑦ 懐かしいふるさとのような、自分自身が癒された経験、解放された経験に気づく

- i 自然によって自分自身が癒され懐かしさを感じる体験
 - ・自分自身が癒され童心に戻る
 - ・ケータイから解放され自由になった
 - ・ゆったりとした時間が流れている事に気付く
 - ・自然の中で時間にあくせくしない自分に驚く
 - ・忙しかったけれど落ち着いた
 - ・畑、山、家、動物、虫っけら、墓、全てがいのちとつながっている
 - ・山里の自然と向き合う暮らしの羨ましさ
 - ・静寂、霧のにおい、急流の音以外何も聞こえない、空気の匂い、山の匂いに気付

く

- ・水のおいしさ、冷たさ、豊かさ
- ・野菜のおいしさ 甘さ
- ・一人で歩きたくなる懐かしい道
- ・縁側のある暮らし、家の作り(台所や土間)の懐かしさ
- ・気になっていた虫が気にならなくなった

ii 自分がもてなされていることに気付く体験

- ・もてなしの心に気付く
- ・いつのまにか村人の物語に傾聴したくなる
- ・初めて逢ったばかりなのに、暑かったろうとスイカでもてなしてくれたところ
- ・手作りの菓子で持てなしてくださったFさんの温かい気持ち
- ・新鮮な野菜を提供してくださるDさんのもてなしの気持ち
- ・おいしいものを食べさせてやりたいというもてなしの心
- ・人の温かさ
- ・人が来ると、はりあいになると言ってきた気持ちの嬉しさ
- ・若い人と会うと元気をもらうと言われた嬉しさ

山村集落の中で、自然、労働、生きざま、数多の回想、固有の地勢・気象を持つ土地、住民や住民同士の絆から癒され、まずは自分が解放されてゆく体験を持つ。その時に学生は感受性を研ぎ澄まし、幾多の知識を学びとる力が発揮されるように見える。過疎山間集落という高齢者には過酷な生活条件でもありながら、先祖が努力されて生きてこられた土地を、自分の代で終わりにはできないという使命感や慣れ親しんできた土地への愛情から大切に守り慈しんでいる姿を感じ取っている。

こうした想いや知見を学生に分け与えようとする能動的な場面を短い間に何回も見ている。

また、表6のように介護福祉の学習課題との関連で尋ねたところ、10人のうち8人以上の学生に人間の尊厳、地域社会と人間のかかわりの学びが自覚されたとする。今後学習内容を細部にわたっての検討が必要である。山間傾斜地の地形や気候、生活（宿泊）の不自由さ等は、学びに消極面も見られ準備過程で

対応を考慮する必要がある。さらに十分に学べなかったとした理由に①もっと行程に自由な時間がほしかった ②暑さに疲れているときの山道や環境は辛い ③事前の集落への知識が少なかった、等をあげている。自由なゆとりある時間を保障することが、その感性を広く発揮させる上で必要であることがわかった。山間地域ゆえの緊張による疲労も考慮しなくてはならない。

表6 学びの自覚

介護の学び	よく学べた	学べた	あまり学べなかった	まったく学べなかった
介護を要する高齢者の尊厳の理解	3	7	0	0
地域・自然と人間のかかわり	7	1	2	0

第4節 考察

(1) 人間と社会、人間の尊厳の理解を深める可能性

2007年から2010年に至る野外学習の試行を基に、介護福祉を学ぶ学生が過疎山村から得る学びを概観した。生活史の理解が尊厳ある介護を提供する際には欠かせないが、学生にとって、高度成長期以降の地域の変容を背景に持つ利用者理解は困難が伴う。しかし、時代の推移は家族の在りようや地域の産業、歴史や文化、個人の行動に影響し、高齢者はその変貌の中を地域の主軸となって生きて来た。これらの理解からどれほど困難な介護の局面においても、生きてこられた道りを共感的に理解しようとする姿勢によって利用者を支え、生活の中にもともに希望を見出すことができる。

生活史を理解する上で（過疎であるがゆえに文化や習慣が比較的良好に保存され、歴史が良く見渡せる）過疎山村地域を歩き、尋ね、もしくはかかわることは、介護福祉士として多様な人生を送る高齢者とのかかわりに必要な想像力を逞しくする

ことを助ける。また人間が社会的、経済的な環境に影響されるだけではなく、主体的にこれらと向き合い地域の絆をもとに公私の力を活用しながら、働きかけ築き上げてゆく力やその想いに目を向けることもできる。戦争や自然災害などで、または集落内の諸関係で人の力の及ばない事象もあったわけで、さらにこれらにいかにか立ち向かい、あるいは、なすすべもなく佇み、どのように生き続けてきたかといった事を理解することは、介護実践で出会う人間像を理解する上で重要である。もっとも、生身の方々とのかかわりであるから、必要以上の話には立ち入らない自制やプライバシーに関する倫理の尊重が前提である。尊厳の理解とはこうした人間の哀しみ、喜びの歩みに、しみじみと共感できた時に得られるものではないだろうか。暮らし自体が苛酷であったB集落への訪問では、生きてきた事、今、生きている事そのものが「人間の尊厳」に値することを学ぶ過程でもあった。こうした試みを玉里（2009）は『園芸療法』の枠を超えて『農村療法』となるかもしれない⁸⁾と交流の意義を述べている。今後事前準備として

の集落の概略の地勢や歴史経済的理解が必要であり、また自治会や集落諸組織、地方自治体諸組織、社会福祉関連事業体、ボランティア組織等との学生受け入れに関する連携が重要である。また学生自身の「人間と社会」「人間の尊厳」に関する理解の現状を把握、学びの目標を個別に組み立てる過程も必要である。

(2) 学びの方法、過程

学生の理解の度合いから学習の目的と方法を選び地域についての事前準備を行うが、学生はこれを主体的に捉えなおし、教員の意図しない発見や学習を展開する力を持った。この体験を語り合い、記録する中で学習課題は一層意識化され深められるよう。このことはまた教員自身に反映し教育観を醸成させる。こうして教員もまた学びの循環の一要素となる。学びの過程を以下のような循環的な過程として活用する事が出来る。

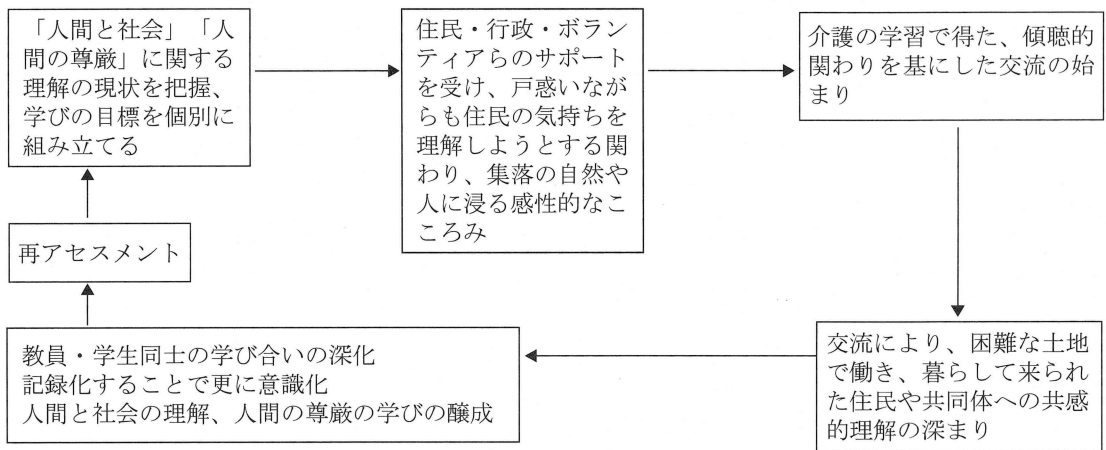


図1 学びの循環過程

(3) 今後の課題

以上、介護福祉を学ぶ学生が社会の中の個人、個人と地域社会の絆、その中で人間の尊厳を如何に学ぶことができるのかを概観した。学生としての介護実践の立場、集落の持続的展開を志向する立場をも踏まえ、

- ① 集落での学びが、実習や実践の場でどのように連動するのかの継続的検証
- ② 過疎山村集落での人間と社会、人間の尊厳を感じ取る為の野外学習が、集落の持続的な展開にどのように影響してゆくのか、住民の

側からの感想を基に検証

- ③ 過疎山村集落での野外授業の継続的、効果的な展開方法の検討等が必要と思われる。

謝 辞

最後になりましたがご指導、ご協力いただいたB集落の皆様、埼玉県、A市の皆様へ御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 厚生労働省資料：「介護福祉教育課程における教育内容の見直しについて」2008
- 2) 藤谷秀：横山貴美子「介護福祉のための倫理学」弘文堂2007
- 3) 西村洋子・太田貞司：「介護福祉教育の展望－カリキュラム改正に臨み－」光生館2008
- 4) 三菱UFJリサーチ & コンサルティングによる公的な提言として24年度介護報酬・診療報酬の同時改定へ向けた提案がされている。2010
- 5) 「求められる介護福祉士像」
 - ① 尊厳を支えるケアの実践
 - ② 現場で必要とされる実践的能力
 等の12項目が挙げられている。
- 6) 石田一紀：「介護における共感と人間理解」崩文社 p121 2002
- 7) 総合ケアセンターサンビレッジ：「尊厳を支えるケア」をめざして 中央法規 2006
- 8) 総務省 自治行政局 過疎対策室：「新たな過疎対策について」2010
- 9) 内山節：「共同体の基礎理論」農文協 p32 2010
- 10) 宮本常一：文化の伝承者としての老人。[歴史と風土の民族学]， p 147 2007
- 11) 総務省：平成21年度第1回過疎問題懇談会資料「時代に対応した新たな過疎対策について」 P 10 2009年度第1回過疎問題懇談会 2009
- 12) 矢内諭：「自立交流する中山間地域」昭和堂 p336 2008
- 13) 多炭雅博等：「農村振興活動を通じた大学専門教育の場としての農山村の価値－地域環境点検活動への参加を事例に－」農村文化研究 第53巻第1号 p11 2009
- 14) 秩父市教育委員会：秩父市吉田町史資料篇(2) 1976
秩父市農業改良普及所編「山峡に生きる」秩父市教育委員会1984
秩父市「秩父市過疎地域自立促進計画」(平成17年～21年) 2005年
- 秩父市(定地法にかかわる)「総合整備計画書」(平成17年～21年) 2005年
- 15) 新井幸恵：「秩父市山間集落に住む一人暮らし高齢者の日常」ゆたかなくらし p 26-31 2009
- 16) <http://www.pref.saitama.lg.jp/page/sientaikatudou.html>
「ふるさと支援隊」活動 埼玉県農林部農地活用課 2010年11月1日検索
- 17) 宮田登：日常性の崩壊。[土の思想]， 創文社 p 35-40 1977
- 18) 玉里恵美子：「限界集落化をこえて」ふくろう出版 P278 2009